

2020 年 5 月 18 日（月）

外国語活動 I

講義内容 第 3 章 小学校の外国語授業実践と授業づくり

○「人を育てる」小学校教員の一環として行われる外国語活動・外国語

- ☞学校で行われる英語教育と英会話学校で行われる英語教育はどこが違うのか？
- ☞授業づくりの際に「この授業は子ども育てることになるのか」と考えてみるのが大切。
- ☞学校全体の教科・領域の目標や内容を考えた上で、外国語・外国語活動が担うものはなんだろうか？

1. 学習到達目標・指導計画

1.1 年間指導計画

- (1) 3 つの資質能力を踏まえる
 - ☞第 4 章で詳しく考えてみます
- (2) 年間指導計画を立て、単元配列を行う
- (3) 目指す生徒像を設定する
 - ☞教育実習の際に、最初に校長先生が学校の「目指す生徒像」を話す理由は何か？
- (4) 指導内容（シラバス）を作成する

場面シラバス⇒「場面シラバス」とは、「空港で」「郵便局で」「スーパーで」など、学習者が遭遇しやすい場面ごとに学習内容をまとめたものです。

機能シラバス⇒「機能シラバス」とは、言語の社会的機能に着目したシラバスです。私たちは言語を使って「挨拶」したり、友達と「雑談」したり、「依頼」したりと、様々な活動を行っています。「挨拶する」「依頼する」「拒否する」「謝る」「注文する」「誘う」など、言語を使って行いたい行動別に指導内容を決めるのが機能シラバスです。

タスクシラバス⇒「タスクシラバス」は Task Based Language Teaching（タスクベースの教授法（TBLT））に基づくものです。何かの課題を設定し、クラスではその課題を学習者に遂行させます。学習者はその課題を遂行する中で、必要な言語表現を使用することになります。その課題を遂行する経験そのものが実践的なコミュニケーション力につながるという考え方です。タスクシラバスでは、例えば初級の場合だと「旅行の計画を立てる」「スーパーで食材を買う」「掲示板の日本語を読む

で、その内容を日本語のわからない友達に伝える」など、実際に起こりうる課題別にシラバスが構成されます。

内容シラバス⇒内容を中心にしたシラバス。大学の英語講読などで使われるシラバス

技能シラバス⇒「技能シラバス」とは、「書く」「読む」「話す」「聞く」などの技能のうち、伸ばしたい技能に着目し、その技能のでさらに詳しく学習項目を設定しているものです。例えば、「話す」技能の場合、「ディスカッションする」「友達を誘う」「プレゼンテーションする」など「話す」技能の中でさらに細かく学習内容を決めていきます。

話題シラバス⇒「話題シラバス」とは、「教育」「宗教」「地理」「ポップカルチャー」など、話題ごとに学習内容をまとめたものです。中上級のクラスで使用されることが多いようです。学習者の興味のある話題であれば、学習者のモチベーションもあがると考えられます。

文法・構造シラバス⇒文法・構造シラバスの利点として以下のようなものが考えられます。簡単な文法・文型からどんどん難しいものへと積み上げていくことができるので、学びやすいし、教えやすい。授業も組み立てやすい。体系的に言語を学ぶことができる。

.....

(5) 題材・言語材料を設定する

☞どのような題材（内容や場面）で言語材料（文法や語彙）を教えるかということ。英語の学習では常に題材と言語材料の二つが柱になっている。中学校の理科を考えた場合、ざっくり言うと内容を教えた方が良いと思う。しかし、英語の場合は内容と言語材料の二つに配慮しないといけない。

1.2 単元計画

(1) 単元構想

(2) 単元の「終末モデル」の提示

☞単元の最後にどのようなことができるようになっていなければならないかを示す。それを目標に単元の計画を立てる。「逆向き設計」の授業。

☞児童生徒も教員も同じ地図をもって目的地に向かうことが大切。今日の授業はどの段階にある授業なのかを児童と共有する。

山中先生が授業の途中で児童とシェアした単元計画（電子黒板：本時は大4時）



1.3 1時間の授業構成

- ☞「発話を急がずに十分なインプットを行うことを大切に、・・・」(p.51)
- ☞第二章の言語習得理論を思い出して欲しい。インプットの重要性が指摘されていた。
- ☞**ということは教師も十分なインプットを与えることができる力を持っている必要がある。**
このことをしっかりと胸に刻んでおいて欲しい。

2. 外国語活動・外国語で大切にしたいこと

(1)「ことば」の学習としての外国語活動・外国語

- ①「ことば」は人と人をつなぐ媒体、道具として大切にしたい。
- ②「相手のことを良く聞く」ことを大切にしたい。
- ③「自分の言いたい、伝えたいこと」を大切にしたい。
- ④「必然性がある、意味のやり取り」を大切にしたい。
- ⑤「自己表現」を通して自己肯定感、他者への関心を高めさせたい。

小学校で特に大切にしたいこと

- ・初めて外国語に触れる段階である小学校においては、母語を用いたコミュニケーションを図る際には意識されていなかった、相手の発する外国語を注意深く聞いて**何とか相手の思いを理解しようしたり**、もっている知識などを総動員して他者に外国語で**自分の思いを**何とか伝えようとしたりする体験を通して、**日本語を含む**言語でコミュニケーションを図る難しさや大切さを改めて感じることで、言語によるコミュニケーション能力を身に付ける上で重要であり、言語への興味・関心を高めることにつながると考えられる。〔学習指導要領(外国語活動)〕p.12)
- ・実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合うなどの言語活動を行う際は、＜中略＞**友達との関わりを大切に**した**体験的な言語活動**を行うこと。(p.43)

10

また、高学年の外国語科の目標を踏まえると、**広く言語教育として**、国語科をはじめとした学校における**全ての教育活動と積極的に結び付ける**ことが大切である。

高学年の外国語科において、日本語とは異なる英語の音声や基本的な表現を用いてコミュニケーションを図ることは、**言葉の大切さや豊かさに気付いたり**、言語に対する興味・関心を高めたり、**これを尊重する態度を身に付けたりすることにつながるものであることから、国語科の学習にも相乗的に資する**ように教育内容を組み立てることが求められる。

(「学習指導要領解説(外国語)」p.125)

11

(2) コミュのケーション力のとらえ方と目指す児童像

- ☞児童像をしっかりと指導案に書き込んでくことが大切
- ☞最終的にどのような児童を育成するのか

学校紹介 ABOUT US

| [学校概要](#) | [学校教育目標と経営方針](#) | [学校の沿革](#) | [校旗・校章・校歌](#) |

本校の教育目標

一人一人が夢をもち、未来を生きる力のある子

21世紀は個性を大事にする時代であることを基盤に、一人一人が目的意識となる大きな夢をもち、自らの生涯となる未来を、自力で生きることができる子。

教育目標設定の基本的な考え

- 未来を生きる人間として、日本・世界を担う児童を育成する。
- 心身ともに健康で、心豊かな児童を育成する。
- 時代のニーズに貢献できる児童を育成する。
- 家庭・地域社会の特性や児童の実態に立脚する。
- 関連する法令に基づいて教育を行う。

本校の目指す児童像（具体目標）

- (1) 自ら学ぶ子（自主）・・・（知）
自ら価値のあるものを求め、よく考え、進んで取り組む子。
- (2) 温かい子（温厚）・・・（徳）
思いやりの心をもち、決まりを守り、仲良く助け合う子。
- (3) 健康な子（元気）・・・（体）
心身ともたくましく、体をきたえ、安全に行動する子。

本校の目指す教師像

- (1) 豊かな発想・想像力をもち、常に子どもの可能性を伸ばし、子どもと共に学び、子どもの自己実現を支援できる教師。
- (2) 子どもの個性を生かしながら研修に励み、常に専門性を高める教師。
- (3) 明朗・誠実・健康で、子ども・保護者・同僚から信頼される教師。
- (4) 大学と連携・協力し、教育実習指導及び地域の教育に貢献できる力量をもった教師。
- (5) 持っている特性、能力を発揮し、正確、迅速、誠実に職務を遂行協力、助け合える教師。

2 学校教育目標から

本校では、人間尊重を基調とした個性豊かな人間性を培うとともに、社会の変化に主体的に対応できる判断力と知性をもった心身ともにたくましい子どもを育成するために、学校教育目標を「豊かな心と自ら学ぶ意欲をもち、よりよく生きようとする子どもの育成」と設定している。

そして、下記のように子ども像を具体化し、その育成をめざしている。

【めざす子ども像】

◇め：めあてをもって、よく聞き、考える子ども

◇い：いつも思いやりのある行動や言葉遣いができる子ども

◇じ：自信をもち、ねばり強く最後までやり抜く子ども

特に、本年度の重点目標では「相手に応じ、自分の思いや考えを言葉で伝える子ども」「自分のめあてをもち、ねばり強くやりとげる子ども」を掲げている。相手の考えをとらえ、自分と関わらせて聴き、理由や根拠を述べて、相手に分かるように自分の考えを伝えることができたり、到達可能なめあてを設定し、課題・問題解決に取り組んだりする子どもの育成を目指している。

そこで、外国語活動（英語活動）においては、相手意識を明確に持たせ、目的や場面、状況などに応じて他者を配慮しながらコミュニケーションを行う学習場面を設けることで、子ども一人ひとりが個々の願いや思いをもって主体的に活動する姿の育成を図る。このことは、本校教育目標の具現化につながるものであると考える。

大牟田市立明治小学校の研究紀要から

(3) 楽しい外国語活動の要素

- ①安心できる授業であること。
- ②所属感を感じることができる授業であること。
- ③成功感を感じることができる授業であること。
- ④自己表現ができる授業であること。

☞言語習得理論と合わせて考えてみよう。

3 授業づくり 5つの視点と授業の振り返りのポイント

3.1 授業づくり 5つの視点

- ①コミュニティづくりの視点
- ②オリジナリティの視点
- ③グループ（ペア）ワークの視点
- ④自己表現力を高める視点
- ⑤既習事項を生かす視点

☞小学校に限らない視点である。授業を参観する時、授業研究会の時など、この視点を持って授業を見るようにしよう。

☞①～⑤を第二章で学んだ第二言語習得理論と関連付けて考えてみてください。

3.2 授業の振り返り

授業振り返りのチェック項目

- ①リラックス感
- ②結果としての繰り返し
- ③個々の表現の場
- ④自己表現の場
- ⑤子どもの側の達成する目標
- ⑥体験・動き
- ⑦既習事項を生かす
- ⑧活動の流れやつながり
- ⑨内容
- ⑩負荷がある

☞授業づくりの 5 つの視点と同じように、小学校に限らない視点である。授業を参観する時、授業研究会の時など、この視点を持って授業を見るようにしよう。

☞①～⑩を第二章で学んだ第二言語習得理論と関連付けて考えてみてください。

4 ALT とのティーム・ティーチングによる授業づくり

☞56 頁にある表をしっかりと理解しておく

5 ICT を活用した授業づくり

5.1 ICT 活用の効果と注意すべき点

- (1) 期待できる効果
- (2) 注意すべき点

6 文字の指導

☞学習指導要領をしっかり読み、文字指導の目標や内容を理解する。

☞英語の文字は難しいということを理解したうえで指導に当たる。

6.1 文字指導の主な留意点

- ①文字指導を急がない
- ②聞く時間を十分にとる
- ③アルファベットの文字を聞いて分かる
- ④アルファベットの文字が書ける

⑤名称と音があることが分かる

アルファベットを使うヨーロッパ14ヶ国を対象としたある国際調査では、小学校1年生に頻度の高い語の読解能力を母語で試したところ、全体の平均正答率が**87%**だったのに対し、英語を母語とする児童の正答率は、わずか**34%**であった。

(『リテラシーを育てる英語教育の創造』卯城ほか)

6

日本語の「ひらがな」が書けるようになった児童は、それを組み合わせて、ほとんど無限の単語を創り出すことが可能です。「や」と「ま」を組み合わせれば「やま(山)」となります。「み」と「か」と「ん」を組み合わせれば「みかん」となります。「あいうえを」の文字が読めれば、そのままの音で日本語の別の単語を創り出すことができます。

7

ところが、英語の文字はそうはいきません。文字と音が必ずしも一致しません。例えば、c という文字は cool のように /k/ と同じ音の場合もあれば、century のように /s/ と同じ音の場合もあります。g は good にみられるように [グ] に近い音の場合もありますが、gesture のように [ジ] に近い音もあります。a, e, i, o, u の文字に至っては2つ以上の音があります。これが英語の単語を読みにくいものにしています。

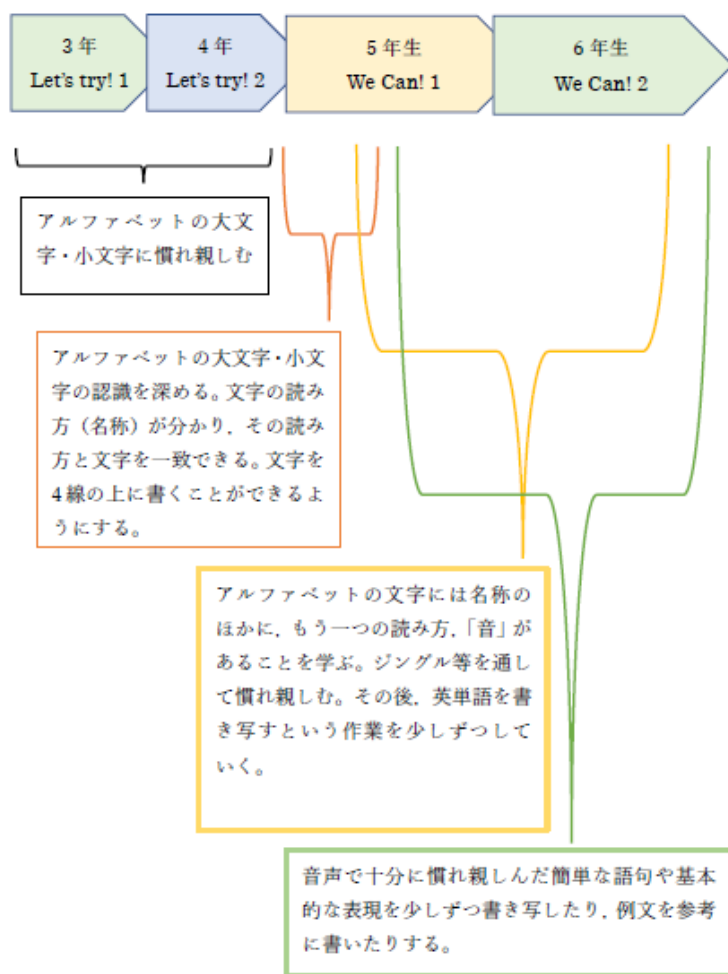
8

ボトムアップ的なアプローチとしてフォニックスがあります。フォニックスは文字とそれに対応する音の関係をルールとして示しながら、学習者が英語の文字を音声化できるようにする指導法です。もともとは英語母語話者の子供たちに、文字と音の関係を教えるための指導法として生まれたものです。ですから、音声としては十分に慣れ親しんでいることを前提とした指導法と言えます。

9

一方、トップダウン的なアプローチとしてホールランゲージ・アプローチがあります。これは、絵本や教室の掲示物などを通して、文字に触れさせ、英語の文字と音の関係についても自然に学習させるというものです。もちろん、英語を母語として学んでいる子供たちに対する指導法としても行われています。

＜図3＞小学校外国語活動・外国語（読む・書く）の鳥観図



6.2 文字指導の例

7 小中連携の工夫

7.1 小中間の指導観の共有とカリキュラムの連携

7.2 小学校教員と中学校教員の連携

☞ 64 頁の表 3-2 を頭に入れて欲しい。

①年間指導計画等の相互提供

- ②授業参観
- ③研修会
- ④教材・教具の共有活用
- ⑤ティーム・ティーチング
- ⑥ALT などの小中共同活用

7.3 学習評価における小中連携

7.4 児童生徒の交流

- (1) 小学生による中学校の授業参観
- (2) 児童生徒の交流授業
- (3) 中学生からの「ビデオレター」「クリスマスカード」
- (4) 小学生から「Thank you カード」